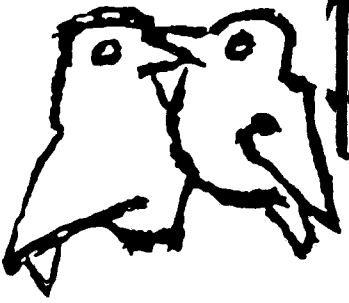
武安君宫崎滋胤全集



苏州大学院图书馆
藏书章

第五卷

武者小路實篤全集　第五巻

一九八八年八月二〇日　初版第一刷発行

著者――武者小路實篤

発行者――相賀徹夫

発行所――小学館

一〇一-〇一　東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号

振替　東京八-一〇〇番

電話　編集・〇三-三二九二-四三七〇

業務・〇三-三二三〇-五三三二

販売・〇三-三二三〇-五七三九

印刷・製本――大日本印刷株式会社

用紙――三菱製紙株式会社

定価＝6800円

Printed in Japan　ISBN 4-09-656005-7

© Mushakōji Saneatsukai 1988

＊著者検印は省略いたしました。　＊造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

武者小路實篤全集　第五巻

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

友情……一
自序
友情……三
或る男……五九
序
或る男……六三
続「或る男」……三〇三
或る男の話……三一二
エピソート……三三六
新しき村の生長……三四一
それを信ぜよ……二四三
人々の真心 ― 自活と云ふこと ― 独立するもの ― 新しき村を ― 新しき村は ―
新しき村そのもの ― 俺 も ― 安心して進め ― 我が尊敬する人々 ― 兄弟姉妹
― 夜中に(一) ― 夜中に(二) ― 仕合せだ ― 神の愛 ― 俺は尊敬する ― 愛する
人間 ― 俺 は ― 俺のやうな人間 ― 俺は死ねる ― 小さき泉と思ふな
一九二一年四月雑記……三四九
村の仕事の宣伝に就て……三五一
雑誌の満三年を祝す……三五四

一九二一年六月雑記……三五五
笠井三郎兄の死を聞いて……三五七
第一新しき村の今後の方針に就て……三五八
工業的な本をよむと……三六一
政府の力と個人の自覚……三六二
一九二一年七月雑記……三六三
雑　感……三六四
一九二一年八月雑記……三六七
新しき村を生み出すには……三七〇
協力生活 一 今の新しき村の欠点 一 新しき村は 一 どの位労働したらいゝか 一 新しき村の設備 一 我等は
一九二一年九月雑記……三七四
一九二一年十月雑記……三七六
満三年に際して……三七七
一九二二年……三七九
一九二二年一月雑記……三八二
一九二二年二月雑記……三八四
新しき村よ……三八六
一九二二年四月雑記……三八七

雑　感……三八八
一九二二年六月雑記……三九三
新しき村に就ての返事……三九四
シルビア・パンカースト氏に
新しき村が……三九六
新しき村について……三九八
我等の使命……四〇四

気まぐれ日記……四〇七
序
気まぐれ日記……四〇九
一九二三年（大正一二年）―一九二四年（大正一三年）

解説・解題……小田切　進……五五七

友

情

〔『友情』扉。岸田劉生画〕

自序

人間にとつて結婚は大事なことにはちがひない。しかし唯一のことではない。する方がいゝ、しない方がいゝ、どつちもいゝ。同時にどつちもわるいとも云へるかも知れない。しかし自分は結婚に就ては楽観してゐるものだ。そして本当に恋しあふものは結婚すべきであると思ふ。しかし恋にもいろ〳〵ある。一概には云へない。この小説の主人公は杉子と結婚しなかつた為に他の女と結婚したらう。そして子が生れたらう。その子が男で、大宮と杉子の間に出来た女の子を恋して結婚するといふことも考へられないことではない。そして両方がお互に生れたことを感謝しあふと云ふこともあり得ないことではない。

夫婦のことは何処か他の処で書かう。

自分はこゝではホイツトマンの真似して、

失恋するものも万歳、結婚する者も万歳と云つておかう。

一九二〇、一、一四

友情

上

一

野島が初めて杉子に会つたのは帝劇の二階の正面の廊下だつた。野島は脚本家をもつて私かに任じてはゐたが、芝居を見る事は稀だつた。此日も彼は友人に誘はれなければ行かなかつた。誘はれても往かなかつたかも知れない。その日は村岡の芝居が演られるので、彼はそれを読んだ時から閉口してゐたから。然し友達の仲田に勧められると、ふと行く気になつた。それは杉子も一緒に往くと聞いたので。

彼は杉子に逢つたことはなかつた。しかし写真で一度見たことがあつた。それは友達三四人とうつした十二三の時の写真だつたが、彼はその写真を何気なく何度も何度も見ないわけに往かなかつた。皆の内で杉子は図ぬけて美しいばかりではなく、清い感じがしてゐた。彼は其の写真を机の前に飾つておいたら、きつといゝ脚本がかきたくなるだらうと思つた。しかし彼は仲田に写真をくれとは云へなかつた。そして其後仲田の処へ行つてももう一度その写真を見せ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てもらふことは出来なかつた。そして当人にも逢ふことは出来なかつた。一度、声を聞いたことがあるやうに思つた。しかしそれは杉子ではなく、杉子の妹の声だつたかも知れなかつた。

彼が帝劇に行つた時はまだ少し早かつた。彼は廊下に出て今に仲田が妹をつれてくるかと思つた。それを心待ちしてゐたが、若い女をつれてくる男が仲田ではないと反つて安心もした。

彼はその時、村岡が友達二三人と何か声高に話しながらくるのに出あつた。彼は村岡とはある会で一度あつたことがあるが、目礼をしたりしなかつたりする間がらだつた。そしてこの頃は逢つても知ん顔をすることを務めてゐた。それは彼が村岡のものをよく悪口云つたからである。今日やられる芝居も彼は公けにではないが可なり悪口云つた。元よりそれは文学をやる仲間同志で云つたので法科に行つてゐる仲田とは殆ど文学の話はしなかつた。仲田は彼が村岡のものを嫌つてゐるなぞと云ふことは知らなかつた。新しいものだから、それに評判のいゝものだから彼もきつと見にゆくだらうときめてゐた。それで説明掛り位に彼をつれて芝居を見やうと云ふのだつた。彼はそれに気がついてはゐた。そしてそれを迷惑にも思つた。しかし断る気にはなれなかつた。

彼は村岡と顔を見合せた。両方がお辞儀したさうにも見えた。併しどつちも自分の方からさきにお辞儀しやうとはしなかつた。お世辞のやうに思はれるのもいやだつたのだろう。或は先にお辞儀して相手に見くびられるのがいやだつたのだらう。少くも村岡は彼より四つ五つ上で、世間にももう認められてゐた。彼は五つ六つ短かい脚本をかいたが、誰にも顧みられなかつたのは事実だ。しかし彼は自分の方から頭さげるには、相手を軽く見てゐた。

とう〳〵お辞儀せずに村岡は通りすぎた。彼がふとふり返つた時、村岡は友達と彼の方をふり返つて何か云つてゐた。

「あれが野島だよ」

「あれか。くだらない脚本をかく奴は」

そんなことを云つてゐるやうに思つた。そして急に不快を感じながら顔をそむけると。

向うから仲田が、妹の杉子とやつて来た。

写真よりはずつと人間らしくなつたと思つた。だが若々しく美しかつた。

「もう、君は来てゐたのか」

「あゝ、少し前に」

「之が野島君だ。僕の妹だ」

二人は黙つて丁寧にお辞儀した。

二

野島は杉子とは殆んど話をしなかつた。杉子が芝居を感心して見てゐるらしいのに、不愉快を感じた。しかしそれは無理もないとも思つた。仲田も感心してゐるやうなことを云つたが、それはむしろ彼にたいするお世辞のやうに見えた。

「矢張り新しいものは、我々に近い感じがするね」

そんなことを仲田が云つた時、彼は別に反対する気にはなれなかつた。

「飯を食はう」

仲田はさう云つて先にたつて行つた。三人は向ひあつて飯を食つた。仲田の妹は野島のゐるのを別に気にはしてゐないらしかつた。しかし殆ど饒舌らなかつた。そして二人の話を別に注意して聞いて

もゐなかつた。それよりは同じ齢頃の女の人が居ると、その女の方を注意してゐるやうだつた。

野島はさうはゆかなかつた。彼は杉子の誰よりも美しいことを感じた。そして杉子のわきにゐることをこだわらないではゐられなかつた。いつも仲田には不遠慮になんでも云へた彼が、今日は何一つこだわらずには云へなかつた。村岡のものゝ悪口も彼は思ひ切つて云へなかつた。しかし彼は心のうちによろこびを感じた。そして呑気なこと許り、いつもより調子にのつて饒舌つた。それが又彼には卑しいやうにも思へたが、心のよろこびはやゝもすると言葉となつて、あふれ出て来た。そして杉子が少しでも笑ふと彼は幸福を感じた。やがて幕のあくリンが聞えても彼はいつまでも其処に腰かけてゐたかつた。

しかし杉子はあはてゝ立つた。

二人もあとをついて芝居を見に行つた。彼はもう芝居は気にならなかつた。たゞ何げなく杉子の顔を見る機会をつくることに苦心した。こゝに自然のつくつた最も美しい花がある。しかも自分の手のとゞくかも知れない処に。しかし彼は杉子とは一言も話す機会をつかめなかつた。たゞ兄と話すのを聞いて、快活な思つたことは何んでも平気で云ふ質だと思つた。そしてはつきりものを云ふ頭のわるくない女だと思つた。

次の幕の間に彼は、とう〳〵聞いた。

「君の妹さんはおいくつだ」

「十六だ。まだ本当の子供だ。背許り大きいが」

「さうか、僕はもう十七八位かと思つた」

彼は本当はもう十九か、二十ではないかと思つてゐた。十六ならまだ安心だ。自分と七つちがひだ。自分が少し有名になる時分に、丁度十九か、二十になつてゐる。

彼はそんなこと迄考へてゐた。彼は女の人を見ると、結婚のことをすぐ思はないではゐられない人間だつた。結婚したくない女、結婚出来ない女、これは彼にとつては問題にする気になれない女だつた。

さう云ふ女にいゝ女がゐると彼は一種の嫉妬さへ持ち兼なかつた。女は彼にとつては妻としてより他、値のないものだつた。結婚が彼にとつてすべてゞあつた。女はたゞ自分にだけたよつてほしかつた。

さう云ふ彼が杉子を見て、すぐ自分の妻としての杉子を思ふのは当然であつた。彼はさう云ふ女を求めてゐた。そして杉子がさう云ふ女ではないかと私かに思つてゐた。処が事実は理想的以上に見えた。自分には少し勿体なすぎるやうにさへ思つた。そして仲田が、その女を自分の妹あつかひし、馬鹿にしてゐるのを勿体ないことをする奴だ位に感じた。

その晩、帰つても杉子のことを思はないわけにはゆかなかつた。

三

二三日たつても彼は杉子のことを忘れなかつた。反つて益々理想化して来た。彼は自分の心の平静を失ひかけた。次の日曜の朝に彼は仲田の処に出かけて見たが、杉子らしい声さへ聞えなかつた。彼は仲田と話しても杉子のことに気をとられて、つい仲田の云ふことを聞きもらすことさへ多かつた。そして何となくおちつかなかつた。仲田とはロシヤの過激派について話してゐた。

「食ふに困れば人間はなんでもする。日本だつて今よりせめて倍も米が高くなれば黙つてゐたつて皆、過激派になる。圧迫し切つても、

何処かにすきはあるものだ。ロシヤに過激派の起つたのは当然だ。又それに反対するものゝ出るのも当然だ。当然と当然がぶつかつて、殺しあふのも当然だ。だがそれで益々米がたかくなるのも当然だ。この当然を何処かで切りぬけて、皆に飯を食へるやうにするのが問題だ。まあ、見てゐるより仕方がない」

仲田はそんな事を云つてゐた。

「当然だが、段々血なまぐさい方に、加速度に進んでゆきさうだ。それも当然だ。しかしもう皆、平和にあこがれてゐるだらう。今偉大な人間が出て来て、それが民衆の希望と一つになれば大したことが出来る。しかしそれは想像以上の事実で、ロシヤには人物も沢山ゐるだらうから、今に事実によつてある解決を与へてくれるだらう。その解決を与へてくれるもので、世界の思想が、大きな影響を受けるだらう。自分はレニンや、トロツキー以上の人物が今に頭をもちあげると思ふ、何処か思ひもかけない処で」

野島はそんなことを云つたが、心はほかにあつて、いつものやうに興奮することは出来なかつた。何かもの足りない。何かおちつかない。彼は立つたり、坐つたりした。いろいろの本をもちだしてはひろいよみした。

「君はどんな人間を尊敬する」

仲田は不意にそんなことを聞いた。

「君の妹さんのやうな方を」と彼はふと云ひたくなつたが、まさか口には出せなかつた。

「僕は、矢張り、正義の観念の強い、意志の強い、信じることを行ふ人間が好きだ。しかし出来るだけ他人の運命を尊敬するものが好きだ。何と云つたつて聖人や、神のやうな人は偉い、一時的の波瀾の為に浮き沈みする人間は尊敬することは出来ない。それから惨酷な冷たい人間は嫌ひだ。いつも損をしないこと許り考へてゐるものも嫌ひだ。何処かに人間の面白味が出なければ」

この時、隣りで杉子らしい笑ひ声が聞えた。しかしそれはすぐ消えて、向ふの室に行つたらしかつた。

「君の理想はどうだ」

「僕は迷つてゐる。今の政治家の考へ、今の法律の基礎は随分白蟻にたかられてゐる気がするよ。之からの政治家はどう手をつけていゝかわからない。目的は世界中の平和、人類の幸福にあることはわかつてゐる。それを又乱さずに国民の幸福を樹立しなければならないこともわかつてゐる。富の不平均も、殊に食へない人間の運命を今のまゝにしておくことのよくないことも知つてゐる。しかしそれをどうしたら一番いゝか、それはわかつてゐるやうでわかつてゐない。第一官吏になる気もしないし、実業家になる気もしない。学者になりたい気もするが、嵐のなかにぢつとおちついて室にこもつてゐるのが、本当か嘘かもわからない。実際、今の法科の学生は自覚をちやんとつかんでゐる人は少ないだらう。何かに動かされてはゐるだらうが、それで皆議論は多いがね」

仲田は野島がうはの空で聞いてゐるのがわかつたか、話をぷつゝとやめた。

「なんでもいゝさ。ぶつかればわかるだらう。皆その人のもつてゐる価値だけ切り発揮出来ないのだからね」

四

野島は昼迄ゐて、仲田の家を辞した。杉子にはとう〳〵逢へなかつた。彼はなんだかものたりない気がして四つ角を右に曲つた。す

ると十五六間さきから杉子が、生花をならひに行つた帰りと見えて葉蘭を油紙につゝんで持つて帰つてくるのに出あつた。彼は不意なのでびつくりして、立ちどまつた。そして気がついて歩きだした時分に、杉子は近づいて来て少し微笑み加減にあいさつした。彼もあはてゝ丁寧にお辞儀した。彼は何か話しかけたかつた。しかし言葉は出なかつた。

杉子は通りすぎた。彼は夢中で、二三十歩歩いてふりかへつた時、もう杉子の姿は見えなかつた。しかしこの僅かなことが、急に彼を別人のやうに快活にさせた。

物質論者に云はすと、こゝに何か知らない物質が、恋する者から好意を見せられると、血管のなかに生ずるらしい。人はその時自づと快活にならなければならない。野島は二十三にはなつてゐたが、女をまだ知らなかつた。

野島はこの気持を自家に帰つてもゝつてゐた。そして誰かに杉子のことを讃美して話したい気になつた。彼はもう杉子のゐる人生を罵る気にはなれない。彼は自然がどうして惜し気もなくこの地上にこんな傑作をつくつて、そしてそれを老いさせてしまふかわからない気がした。

ともかく彼は日本の女の内に、殊に自分の近い所に、杉子のやうな女のゐることを讃美し、感謝したい気になつた。日記にこんなことをかいた。

「人生は空かも知れないが、そして色即是空かも知れないが、このよろこびは何処からくる。このよろこびを我等に与へてくれたものに、讃美あれよ。」

彼は家にぢつとしてはゐられなかつた。何処かに行かないと、おちつかない気になつた。彼は一番親しい大宮を訪ねることにした。

うちにゐるといゝがと思つたら、矢張りうちにゐた。その友は小説をかいて少しづゝ世間に認められて来、彼のものよりはいつもほめられてゐた。この事は彼を時に淋しくさせた。しかし大宮との友情はそれで傷つけられるわけはなかつた。お互に尊敬してゐた。大宮は殊に彼の作物に厚意を見せ、世間が悪口を云ふ時は、淋しがる彼を慰めることに骨を折つた。野島はそのことを思ふと涙ぐみたい気さへした。彼が当時自信のある作をあつめて本を出した時も、大宮が自分の本でも出すやうに骨折つてくれた。そしてその本が或人からさんざん悪口云はれた時、大宮は彼を祝して、

「君は前に復讐を受けてゐるのだ。君程よはらなくつていゝ人間はないと思ふ」

と云つてくれた。彼はその時、泣きたい程大宮の友情に感じた。そして大宮を自分の知己としてその期待を耻かしめたくないと決心した。二人はお互に慰めあひ、鼓舞しあつた。勿論、ある時は、お互に手きびしく批評しあつて腹を立てあつたこともあつたが、すぐなほつて、反つて相手の云ふことが尤だと気がついてあとで心のうちで感謝し、なほ友情のますのをおぼえた。

大宮は彼が来たのを喜んだ。そして今まで読んでゐた内村さんの本などを見せた。大宮は内村さんのものを愛読してゐた。

大宮の書斎には以賽亜（イザヤ）の四十章の

「然れどエホバを俟望（まちのぞ）むものは新なる力を得ん。
彼等は鷲の如く翼を張りて登らん、
走れども疲れず、歩めども倦（う）まざるべし」

と云ふ字が新にかゝれてピンではつてあつた。野島はそれを見て充実し切つた、力強い言葉だと思つた。

五

彼はしかし杉子のことを云ひ出す機会がなかつた。又云はうかと思ふと同時に云ひたくない気もした。

二人は文壇の話や、自分達の仕事の話や、読んだ本の話などした。そして自分達のしなければならない仕事の困難な、しかし希望の多い話をした。

この時、大宮は今朝ある雑誌から小説をたのみに来たと話した。その雑誌は有名な雑誌で、その雑誌に小説を出すと、小説家としての存在を世間に知られることになるのだ。

彼はその話を聞いた時、矢張り少し淋しくなつた。物質論者ならば、その一言で野島の脳のなかに何か毒素が生れたにちがひない、野島も亦そんな気がした。嫉妬、そんな名のつく。彼はそれに打ち克たうとした。又友の成功は自分達の成功を意味するのだとも思つても見た。しかし毒素はどいてはくれなかつた。自分は実際自分を信じてゐるが、彼は自信に時々不安を感じないわけにはゆかなかつた。大宮はそれにすぐ気がついたらしかつた。大宮は

「こないだ津田にあつたら君のものに随分感心してゐた」

と云つた。此一ことは彼の毒素を消滅させるのに最もきゝめのある注射だつた。彼は自分ながら情けない程、他人によつて自分の気分があがりさがりするのに気がつかないわけにはゆかなかつた。彼は大宮と希望のある話をし、そして大宮の今度その雑誌に出す作のいゝことを信じ、そして自分達の勝利の道が近づきつゝあることを祝した。

帰りに彼は自分の人格のあまり上品でないことを反省した。自分は杉子の夫に価しないものだ。勉強しなければと思つた。

彼は自分にたよるものを要求してゐた。自分を信じ、自分を讃美するものを要求してゐた。そして今や、杉子自身にその役をしてもらひたくなつた。杉子は彼のすることを絶対に信じてくれなければならなかつた。世界で野島程偉いものはないと杉子に思つてもらひたかつた。彼の仕事を理解し、讃美し、彼のうちにある傲慢な血をそのまゝぶちあけてもたぢろがず、かへつて一緒によろこべる人間でなければならなかつた。

しかし彼は自分を顧みる。そして自分の尊敬する人々のことを思ふ。自分の力なきものだと云ふことをあまりに露骨に知らないわけにはゆかなかつた。まだ二十三だ。しかしそんなに偉い素質があるだらうか。たゞ自惚れにすぎなくはないか。

彼は日本の文壇の先輩を心私かに軽蔑してゐた。しかし自分の現在の仕事を思ふと、彼等以上とは云へない気がした。

彼はイブセンや、ストリンドベルヒ、トルストイ、そんな人のことを思ふと情けない気がした。自分が一体文学をやるのさへ、僭越なのではないかと思つた。

世界には嵐が吹きまくつてゐる。思想の嵐が。その真唯中に一本の大樹として自分が立ち上つて、一歩もその嵐に自分を譲らない、その力がほしかつた。そしてその力を与へてくれるのは。

杉子だ。杉子が自分を信じてくれることだ。

「妾はあなたを信じてゐます。あなたは勝利を得る方です。あなたの誠実と、本気さは、あなたを何処までも生長させます。淋しい時は妾がついてゐます。しつかり自分の信ずる道をお歩きなさい。あなたの道は遠く、あなたは馬鹿な人からは軽蔑されます。だがあなたはあなたでなければ出来ない使命をもつてゐらつしやいます」

かう云つてくれたら。あの美しい、清い、生々した、純粋な杉子から。

彼は先づその資格をつくりたいと思つた。

「杉子はまだ若い。四年たてば俺だつて今の俺ではない」

六

彼はそんなことを思つては見たが、杉子を十六だとは思へなかつた。そして十七八で結婚しないとも限らない。杉子は男の注意を惹かないには美しすぎる。誰か杉子を見て心を奪はれない男があらう。仲田の友達は可なり多い。それ等が杉子に気がつかないわけはない。さう云へばいつか仲田が妹に手紙をよこした不良青年があるやうに云つてゐた。今思ひだす。彼は不安を感じないわけにはゆかなかつた。彼は恋するものゝ不安を感じないわけにはゆかなかつた。

彼にも一人の妹がゐて、今は夫と一緒に外国に行つてゐた。今年二十一になる。彼は妹が齢ごろになつてから、いろ〳〵の男の人が妹に近づかうとしたのを思ひ出した。妹はさう美しい女には思へなかつた。しかしそれでも妹の処にいろ〳〵機嫌をとりにくる者のあるのを感じた。妹が琴をならひに行つてゐた。其処に尺八をならひに行つてゐた男が時々来たことがあつた。彼はその男を嫌つて、其の図々しさを心配した。そして妹が笑ひながら呑気にその男と話するのを見ると、ある不安さへもつた。しかし妹もその男を軽蔑してゐることを知つて安心した。

又自分の友達で女のこと切り興味をもてない男が、自分に話もないくせによく来て、妹にいろ〳〵土産をもつて来たり、手紙をよこしたり、歌留多やトランプをしたがつたりするのを気にしたこともあつた。それやこれや考へると彼は齢ごろの娘をもつ親や、兄や、姉の心配をはつ切り感じることが出来た。どうかして真面目な、そして妹のことを本当に思ひ、愛してくれる人が妹の夫になつてくれゝばいゝがと思つた。

しかし幸に彼の妹は馬鹿ではなかつた。運命が許した最もよき人を選んだ。彼はその時心から安心した。杉子のことを思ふに従つて餓ゑたる狼がすきをねらつてゐるやうな気がした。自分の妹より何層倍美しいかわからないだけ、彼はその心配をしないわけにはゆかなかつた。

仲田は友達づきあひの多い方だつた。殊に仲田の母は人づきのいゝ人で、夫の無口のせいか、一人で愛想よくし、若い人達のくるのをよろこんでゐるようにも見えた。彼も仲田の母に二三度あつて、お世辞を云はれたことがあるが、彼は無愛想の方なので、この頃は仲田の母は彼の処には殆ど出て来なくなつた。

娘を射るのには先づその母を射よ。こんなことを云つて母にとり入つて、首尾よくその娘と結婚した男の話を彼はいつか、大宮から聞いたことがあつた。彼はその時可なり不愉快を感じ大宮と二人でその男の悪口を云つたことがあるが。彼は杉子の母に自分の印象の面白くないことを自覚することは、今の彼にとつては少し打撃であつた。

七

彼には結婚することが二人にとつて幸福でなければならなかつた。又よろこびでなければならなかつた。杉子が自分の処によろこんで来てくれなければ、彼の自尊心はむしろ結婚したくないと思ひたが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com